



革新なきとらじに 伝統なし

NPO法人ガイア・イニシアティブ

代表

野中ともよ



主従を強制する手段であってはダメだ。

「革新なきとらじに 伝統なし」

いつも大切にしている言葉である。

数年前、師と呼ぶべき宇城憲治氏とのご縁をいただいた。スポーツではない空手。戦わずして勝つ。他尊自信。稽古照今。私の中でスポーツというカタカナが崩れ落ちた。「道塾」という座学と実践の場。そして、稽古場での学び。さまざまな機会です。

「氣」の本質を見せていただいた。何十人もの黒帯を指一本も触れずして倒す。勝負に勝ちたい、と足掻く輩より、無垢な子どもたちにこそ、真の「力」は備わっていると説く。ご自身で国際特許をいくつも持つ頭脳と、鍛え抜かれた身体が、自在に宇宙のエネルギーを味方につけて技となす。はつきりと可視化された「氣」の本質が、そこに実在する。

古の「礼」や「技」に宇宙物理にも通じた革新。新たな国を拓く「道」の存在が、閉塞感に窒息しそうな国と心に光を与えてくれている。

ヒトは「言葉」で思考を結ぶ。だから、「飴」より「キャンディー」と聞くと、何となくミルクっぽい味をイメージしてしまう。

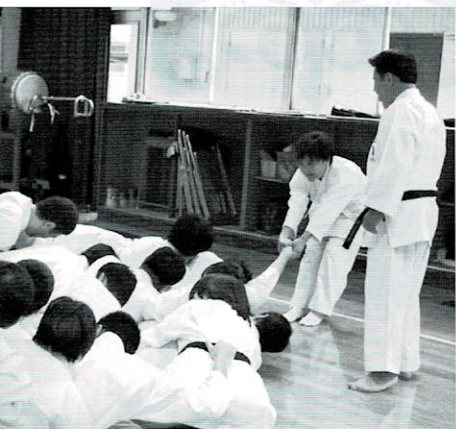
昔「体育」は嫌いだけど、「スポーツ」は好き」というコピーがあった。外来語こそがお洒落という感覚。スポーツならば楽しいけれど、漢字の体育だと根性感満載で、堅苦しくて窮屈みたいな。もちろん「電髪」よりは「パーマ」の方が、「理髪店」よりは「サロン」の方が綺麗な髪型に仕上げてくれそうな気もしてくるが、須くカタカナ文化優勢社会が拡がった。でも、世界第2位の債権国時代が終わわり、負の30年と呼ばれる平成を越えて、漸く気がつき始めたように思う。このままでは駄目になる。

コロナの所為か？ 否。コロナは日本に変化のスピードを10年早く届けてくれたのであって、未来を拓くためにシフトしなければならぬ課題はすでに存在していた。激変する地球の変化(政治も文化も経済も教育も)に無頓着。昭和の成功体験を引きずって変化を嫌い、チャレ

ンジを良しとしない世代や慣習があった。その病巣には目を向けず、コロナ対策の名の下での「ニューノーマル」作りなど、単なる応急処置に過ぎない。「ウィズコロナ」の止血をしている間に、「アフターコロナ」、つまり、日本はこれから何で食べていける国になるのか。このしつかりとした処方箋作りが必要なのだと思う。

政治、経済政策、教育制度……人的病巣も、組織的金属疲労も散在し過ぎていて、どこから手をつけて良いのか途方に暮れるが、一番大切なことは、一人一人の「人間力」の回復、再創ではないか。カタカナ文化に浮かれ、お金の力に溺れ、古来からあった和語漢字を軽んじてきた心の振る舞いを改めてみる。培われ伝承されてきた日本の伝統文化や慣習にこそ、私たち固有の誇りが生きている。それを取り戻す。ここにこそ、重要な鍵があると秘かに思っている。

カタカナを脱いで、己の尾骸骨に残る、古を観る。だが、決して排他や驕りであってはならない。徹の生えた、懐古的全体主義や封建的な



宇城憲治先生(右端)の指導を受ける筆者(その左)